環境に優しい電気の使い方を考えてみませんか

スマートメーター設置家庭を募集します

皆さんは「スマートメーター」をご存じですか？

スマートメーターとは、双方向通信機能やほかの機器の管理機能を持つ、高機能型の電力メーターを含んだシステムのことです。電力メーターに近距離無線機能を組み込み、冷暖房機器や照明といった、家庭や事業所内の設備系機器に接続。電力メーターを介して、機器の稼動状況やエネルギー利用量などをネットワーク経由で電力会社などが管理するというものです。家庭内のエネルギー利用状況をデータ化して利用者に提示することで、省電力と環境への配慮を促す効果があり、欧米の電力会社では本格的に導入が始まっています。

今回、町と国立環境研究所、釧路公立大学、日本アイ・ビー・エム㈱、ＧＥエナジー・ジャパン㈱では、平成23年度に予定している事業の予備調査として、町内でスマートメーターを設置することにしました。日本国内でのスマートメーター設置は、これが初となります。

このスマートメーターを設置し、調査にご協力くださるご家庭を募集します。設置に係る費用は無料ですので、スマートメーターを通して環境に優しい電気の使い方を考えてみませんか。

▶募集家庭／４世帯程度

▶設置開始／４月中旬～下旬（予定）

▶応募条件

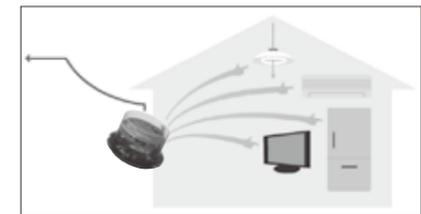
- スマートメーター設置に係る工事を承諾くださる方。
- スマートメーター設置により得られたエネルギー利用状況などのデータを町に提供していただける方。
- ネットワーク環境のある方。（必須条件ではありません）

▶注意事項

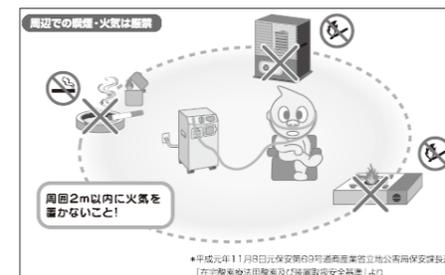
※応募者多数の場合は、設置条件などを勘案し、決定させていただきます。

※ご応募いただいても、設置場所の条件などにより、必ず設置できるとは限りませんので、あらかじめご了承ください。

▶応募締め切り／３月26日㈮

❑応募・問い合わせ先／役場企画財政課環境室環境政策係☎４８２-２９１３（課直通）まで。

在宅酸素療法における火気の取り扱いについて

在宅酸素療法を行っている患者さんのお宅で、喫煙などが原因と考えられる火災により亡くなっている方が、毎年多数報告されています。在宅酸素療法を受けている患者の方やその家族の方などは、酸素吸入時の火気の取り扱いなどについて、以下の点を十分に理解して、酸素濃縮装置などをご使用ください。

1. 高濃度酸素を吸入中にたばこなどの火気を近づけると、チューブや衣服などに引火し、重度のやけどや住宅火災の原因となります。
2. 酸素濃縮装置等などの使用中には、装置の周囲２メートル以内には火気を置かないこと。特に酸素吸入中には、たばこを絶対に吸わないでください。
3. 火気の取り扱いに注意し、取扱説明書どおりに正しく使用すれば酸素が原因でチューブや衣服などが燃えたり、火災になったりすることはないので、過度に恐れることなく、医師の指示通りに酸素を吸入してください。

※厚生労働省のホームページ（http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000003m15.html）に詳しく掲載されていますので、そちらもご覧ください。

原野紀行 第59回

更科源蔵（さらしなげんぞう）

●1904（明治37）年、弟子屈町熊牛原野（南弟子屈）に生まれ、1985（昭和60）年に81歳で逝去。東京麻布獣医学校を中退した後、尾崎喜八、高村光太郎に師事し、詩作を中心に郷土史、アイヌ文化研究など主に文学活動を続けた。

▶弟子屈町で所蔵しているさまざまな資料を紹介する。

双子山の自宅　ペチカの前の更科ー1961（昭和36）年ころ

著書の検印などに使っていた自作のエゾシカ印

かたつむりの殻－双子山の家

戦後、妻を迎え、新しい家族も増えた更科は、浪人長屋のメンバーたちと、道内の市町村史や北海道郷土研究会の調査やＮＨＫの嘱託として道内を忙しく動いています。

そのころ更科は、外出していても消防自動車のサイレンの音を聞くと、今住んでいる長屋が燃えているような錯覚に陥ることに悩んでいました。それは、戦後の農地改革で、不在地主ということで熊牛原野の土地が取り上げられてから、自分を支えていた支柱を失ったような不安とも重なり合っていたのです。

１９５４（昭和29）年、浪人長屋の仲間・高倉新一郎（北大教授）が、札幌の円山にあった農地の南斜面を「君が家を建てるのなら使ってもいいよ」と言い、建築家の田上義也が「オレが君の家を建ててやるから任せろ」と言ってくれます。

家を建ててくれた田上義也は、旧帝国ホテルを手掛けたアメリカの近代建築の巨匠のもとで修業をし、旧小熊邸や網走郷土博物館などを設計した人です。更科との出会いは、田上が１９３４（昭和９）年ころ、弟子屈の湯の島に建設していた近水ホテルの設計監理で滞在していたときです。田上は更科を「ある日、橋の向こうからフサフサと髪の毛の長い、口ビルの赤い青年がやってきた…。背たけは高く、からだはすこぶるがんじょうそうであった。それはイナゴと野蜜をたべている若いヨハネのような風貌をしていた」と振り返ります。

昭和29年ころの更科は、忙しいとはいっても、家を建てられるようなまとまったお金が手元にあるわけではないのですが、市町村史の仕事の報酬が近く入ってくるので、田上義也に相談をすると「…ブロック建築の養成所の学生を使ってやれば大丈夫」と答えます。しかし、町村からの入金が遅れ、工事の方はそのお金をあてにして進めているので、遅れてしまいます。年内に引っ越しをしようと更科は、まだ窓も戸もない家に荷物を運びます。２週間ほどで窓や戸が入り、やっと人間が住む環境になってきて年を越しました。更科は田上に「部屋のブロックのすき間から札幌がみえるんだなーそれに寝室に寝ているとオレのハゲ頭に雨だれがだれるぞー」とクレームをつけますが、それは気心の知れた間柄のたわ言でした。

更科は、家族とともに散歩に出かけます。その道すがら、カタツムリの殻を拾いました。更科は「吾々（われわれ）にもこんなのができたんだナ」と、赤いレンガペチカのある家のことを思います。